

№. 382【2019年11月15日配信】
青森市の水道完成から満110年(担当:鈴木)

こんにちは！ 今年も残すところ1か月半となりましたね。

さて、青森市の水道は来る12月6日で、明治42年(1909)の敷設工事完成から満110年になります。横内川を水源とする青森市水道の創設は全国的にもかなり早い時期でしたが、その完成までには長い道のりがありました。

良質な井戸水が少なかった青森の人々にとって、良い飲料水を得ることは大きな課題でした。また、不衛生な水が伝染病流行の原因とする意見もありました。そこで、明治24年に大日本私立衛生青森県支会が結成され、会長に就いた佐和県知事は、その翌年、水道敷設委員会を組織しました。それにより、人々の水道敷設への気運が高まりました。ただ、戦争や自然災害発生の影響、財政的な問題などにより、このときは実現に至りませんでした。

しかし、衛生上の問題に加え、船が寄港し鉄道が通るようになった青森町が、交通の要衝として発展していくためにも水道敷設を求める声は強まりました。さらに社会事業家の柏原彦太郎は防災上からの必要を訴え、また市助役の川田瑞穂も水道により生じる利益を挙げて、その必要性を説いています。



配水本管敷設工事のようす(『目で見える青森の歴史』より)

その後、明治31年に青森水道期成同盟会が組織され、ようやく予算の目途が立ち、敷設が認可されたのは同39年9月のことでした。そして翌10月には臨時水道部が発足、敷設工事の準備が始まりました。

明治40年6月、現在の横内浄水場の場所で盛大な起工式が催され、いよいよ工事が始まりました。水源地から浄水場まで水を引き、そこから合子沢・新町野を経て水管橋で荒川を越します。さらに荒川通りまで延びて柳町方面へ向かう本線と、途中で分岐し荒川に沿って歩兵第五連隊(現青森高校)方向へ延び松原方面へ向かう支線が建設されました。ただ、最初の頃はよく水道管の継ぎ目から漏水し、道路に噴水ができたそうです。

明治 42 年からは、利用申込みの受付が始まりましたが、はじめのうち人々の水道への理解はなかなか進みませんでした。同年 5 月 3 日付『東奥日報』記事では「水道申込早わかり」と題して、水道は無料では飲めず貸し借りもいけない、飲むなら家庭毎に引く「専用栓」か、市中に 150 か所ほど設置される予定の「共用栓」（使用料を払って共同で使う）のどちらかを選んで申し込まなければならないと解説しています。さらに 7 月 10 日付記事では、東京よりも水質がよい、石鹼がとけやすいので洗濯に適している、鍋釜が腐食しにくいなど水道水の利点を挙げて理解を促しました。

そうした PR が功を奏し、翌 43 年 2 月 1 日時点では専用栓 873 人、共用栓 2008 人が利用しており、そのほかにも申し込みを済ませて供給を待っている人が多数ありました。

こうして創設された念願の水道でしたが、明治 43 年 5 月 3 日に未曾有の大火が起こり、6 月下旬に予定されていた落成式は残念ながら開かれなかったのです。